論　文

若い読者のための要約版『ハムレット』——『シェイクスピア物語』におけるチャールズ・ラムの創造的アプローチ——

李　春美[† a)]

Hamlet Abridged for Young Readers: Charles Lamb's Creative Approach to Shakespeare

Choonmi LEE[† a)]

あらまし　王政復古期以降のシェイクスピア改作に焦点が集まる中，散文形式による改作は等閑視されてきた．本論文は，文人としての名声を未だ獲得できずにいたチャールズ・ラムが「文学的変装遊戯」の延長上で『シェイクスピア物語』（1807）の 6 つの悲劇を書いた可能性に着目し，後の「シェイクスピア悲劇論」（1811）においても取り上げられた劇の 1 つであり，シェイクスピア劇の中で最も長い悲劇であるがゆえに，紙幅上大胆な削除を余儀なくされた『ハムレット』の「要約」（abridgment）を検証する．特に，本論文は，「要約」においてチャールズが生み出した創造的な物語言説に注目し，読書を通して若い読者に文学的体験を手ほどきするというチャールズの「新しい」創造的アプローチを再評価する試みである．

キーワード　『シェイクスピア物語』，チャールズ・ラム，児童文学，ナラトロジー

Abstract　While the research focus has been on Shakespearean adaptations since the Restoration, adaptations in prose form have been neglected. This paper focuses on the possibility that Charles Lamb, who had yet to achieve literary fame, wrote the six tragedies of *Tales from Shakespeare* (1807) as an experiment of 'literary forgery'. This paper examines the abridgement of *Hamlet*, which he discussed later in "On the Tragedies of Shakespeare" (1811). Because of the length of the play, Charles had to boldly delete many of the scenes. In particular, the paper draws attention to the creative narrative discourse Charles produced in the abridgment and attempts to reassess his 'new' creative approach to guiding young readers to literary experience by reading.

Keywords　*Tales from Shakespeare*, Charles Lamb, Children's literature, Narratology

1. まえがき

1805 年，急進的な政治思想を展開した『政治的正義』（*Enquiry concerning Political Justice*, 1793）の著者で知られるウィリアム・ゴドウィン（William Godwin）は，探究心あふれ，知的で，批評力を有した新しい若者文化を生み出すために，ロンドンで子ども向けの本の出版業ジュヴナイル・ライブラリー（Juvenile Library）を開業した．子どものためにシェイクスピア悲劇をフランス語に翻訳した J.B. ペラン（Jean Baptiste Perrin）による『道徳物語集』（*Contes Moraux et Instructifs, à l'usage de la Jeunesse, tirés des Tragédies de Shakespeare*, 1783）の先例を追い，ゴドウィンの後妻でありビジネスパートナーでもあるメアリー・ジェーン・クレアモント（Mary Jane Clairmont）が，子ども向けシェイクスピアを出版したいと考えて，当初はメアリー・ラム（Mary Anne Lamb）に執筆を依頼し，弟チャール

† 大阪国際工科専門職大学，大阪府
Faculty of Technology, International Professional University of Technology in Osaka, 3-3-1 Umeda, Kita-ku, Osaka-shi, Osaka, 530-0001 Japan

a) E-mail: lee.choonmi@iput.ac.jp

ズ（Charles Lamb）が加わることになった企画が，『シェイクスピア物語』（*Tales from Shakespeare*, 1807）である．

奇しくも『シェイクスピア物語』が出版された同年 1807 年に，「紳士が淑女の前で声に出して読むのにふさわしくないものは除外する」(注 1) ことを目的としたバウドラー姉弟（Thomas and Henrietta Maria Bowdler）による『家庭のためのシェイクスピア』（*The Family Shakespeare*）も出版された．主として女子を対象とした家庭内教育という共通の目的をかかげながら，バウドラー姉弟の『家庭のためのシェイクスピア』は毀誉褒貶の激しい評価を受ける一方で，ラム姉弟の『シェイクスピア物語』は，その後，著名なシェイクスピア学者や文人による版が重ねられ，シェイクスピア劇への正統な入門書として児童文学上の地位を獲得している [2]．さらに世界中で少なくとも 40 カ国語に翻訳され，その人気は子どもの読者ばかりではなく，大人の読者にも及んでいる．

ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）ではなく，今やメアリーとチャールズのラム姉弟が主著者として扱われる『シェイクスピア物語』は，シェイクスピア作品の再話・翻案（retelling/adaptation）の起源としてその影響を射程とする児童文学史的アプローチ [3, 4] を始めとして，ロマン主義時代における子ども観の変遷にともなう児童文学の娯楽的かつ道徳教育的側面と検閲の問題 [5]，実質的な購買層である大人に向けたマーケティング戦略 [6] など，現在，実に多様な研究アプローチが試みられている．特に，共同著者でありながら，精神疾患がもたらした悲惨な家庭内殺人のせいで長らく等閑視されたメアリーの役割がますます注目を集めるにつれて，メアリーが『シェイクスピア物語』の「序文」において特に少女読者を焦点化したジェンダーの問題 [7], シェイクスピア作品の初期女性編集者としての先駆例に着目する研究 [8, 9] も見逃せない．

一方，1987 年，ブリティッシュ・アカデミーにおける講演「シェイクスピア講演：シェイクスピア物語」“Shakespeare Lectures: Tales from Shakespeare”の最後において，スタンリー・ウェルズ（Stanley Wells）は「散文的な脚色はほとんど顧みられることなく，絶大な人気を誇っており，その改訂や再解釈も過激であることが多い」(注 2) と指摘して，シェイクスピア研究の可能性を示唆したが，『シェイクスピア物語』を原点とする若者向けのシェイクスピア作品の再話・翻案，改作は，いまだサブ・ジャンルとして等閑視されているようだ．事実，この分野における比較的新しい研究書として，アビゲイル・ロキソン（Abigail Rokison）の『若者のためのシェイクスピア』（*Shakespeare for Young People*, 2013）が挙げられるが，ロキソン自身も，「本書は網羅的なものではなく，若者がシェイクスピアに関わり，劇の楽しみと理解を広げるために行われている作業のスナップショットに過ぎない」(注 3) と明言しているように，ウェルズ以降，この多様で創造性あふれるサブ・ジャンルの研究は進展しているとは言い難い．

しかしながら，ウェルズが指摘したような大胆な再解釈の試みや可能性は，出発点であるラム姉弟の『シェイクスピア物語』の中にすでに見出すことができるのに看過されてきたのではないだろうか．特に弟チャールズの初期著作活動における文学偽造（literary forgery）の実践 [12] に着目すると，『シェイクスピア物語』は，その「序文」で示されたように，シェイクスピアに対する実験性や創造性にあふれたアプローチであることが明らかになる．

本論文は，詩人・劇作家として未だ名声を獲得できずにいたチャールズ・ラムが文学偽造の延長上で『シェイクスピア物語』の 6 つの悲劇を書いた可能性とその実験的かつ創造的アプローチに着目し，後の「シェイクスピア悲劇論」（“On the Tragedies of Shakespeare”, 1811）(注 4) においても取り上げられた劇の 1 つであり，シェイクスピア劇の中で最も長い悲劇であるがゆえに，紙幅上大胆な割愛を余儀なくされた『ハムレット』の「要約」

（注 1）：文献 [1] I, pp.xvii-xviii.

（注 2）：文献 [10] p.152.

（注 3）：文献 [11] p.13.

（注 4）：文献 [13] I, pp.97-111.

（abridgment）において検証する．

2. 先行研究

チャールズの文学偽造について最初に言及した1874年のウィリアム・カルー・ハズリット（William Carew Hazlitt）[14] 以来，チャールズ・ラムの初期文学活動における文学偽造への関与に焦点を当てた研究は進んでいるとは言い難く，近年では、ディビッド・チャンドラー（David Chandler）による論考 [12] が新しい．特に，本論文が研究対象とする『シェイクスピア物語』に関して，チャールズの文学偽造の経験に言及した考察はE.V.ルーカス（E.V. Lucas）(注5) が最初であり，著者が知りうる限り本格的な先行研究と言えるのは，チャールズを文学偽造に誘った時代背景を射程にとらえつつ，シェイクスピア作品の翻案（remediating）のための実践を理論的に説明しているハワード・マーキッテロ（Howard Marchitello）[15] である．日本においては，チャールズ・ラム伝を出版した福原麟太郎がチャールズの文学偽造を「面白い遊戯」(注6) とのみ言及したことが認められるが，福原はチャールズの初期文学活動におけるこの遊戯活動の意義を看過しているようだ．

本論文は，このような先行研究の不足を埋め，チャールズ・ラムの初期文学活動における文学偽造の意義を，シェイクスピア作品を新たにするチャールズの実験性や創造的アプローチから評価する．

3.「文学的変装遊戯」の時代を生きて

18世紀，悪徳に手を染めている意識を持たず，古典の権威を騙り新たな作品の発表を行う，あるいは，原典のない翻訳や贋作・偽作を行う「文学的変装遊戯」[17] が流行り，特にイギリスにおいて，ジェイムズ・マクファーソン（James Macpherson）とホレス・ウォルポール（Horace Walpole）が登場した1760年代は，偽作・贋作の黄金時代と称された [18, 19]．その後，「第4の贋作者」(注7) と揶揄されたサミュエル・アイアランド（Samuel Ireland）とその息子ウィリアム・ヘンリー（William Henry Ireland）によるシェイクスピア贋作事件が続く．

アイアランドの贋作事件 [21] は，「文学的変装遊戯」を育んだ18世紀イギリスにおける郷愁をともなう中世趣味とともに，ロマン主義時代に至って加熱するシェイクスピア崇拝（bardolatry）を考慮せずには語ることができない [22]．アイアランドと同年に誕生したチャールズ・ラムも，このような「文学的変装遊戯」の時代を生きた．

シルヴァーン・バーネット（Sylvan Barnet）は，1953年の『ノーツ・アンド・クエリーズ』（*Notes and Queries*）において，シェイクスピア贋作事件が，チャールズに喜劇『ミスターH，笑劇』（*Mr. H_, A Farce in Two Acts*）を執筆するきっかけを与えた可能性を示唆したが [23]，同時代を賑わせたひとつの贋作事件がチャールズに与えたであろう影響は，生計のため，南海商会で事務員に甘んじつつも，詩人としての立身出世を狙っていたチャールズを実際に「文学的変装遊戯」へと導いた．

1796年5月27日消印のサミュエル・テイラー・コウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge）に宛てた手紙において，チャールズ自身が，友人ジェームズ・ホワイト（James White）の『フォールスタッフの手紙』（*Original Letters, &c. of Sir John Falstaff and His Friends*, 1796）はアイアランドによって発表された『ヴォーティガン』（*Vortigern*, 1796）に着想を得たと言及しているばかりでなく，その「献辞」はチャールズが書いたのではないかと推測されている (注8)．

さらに，1800年4月5日付のトマス・マニング（Thomas Manning）への手紙に書かれているように，コウルリッジに勧められるまま，「モーニング・ポスト」紙に，愛読する『憂鬱の解剖』（*The Anatomy of Melancholy*, 1621-51）の作者ロバート・バートン（Robert Burton）作とされる原稿の「模倣」‘two imitations of Burton’を手掛けたりもし

（注5）：文献 [13] I, p.394.
（注6）：文献 [16] p.43.
（注7）：文献 [20] p.232.
（注8）：文献 [13] VI, pp.2-5.

た[注 9]．実際には掲載を断られたものの，この原稿は，後に，チャールズ・ラムによる最初の悲劇として，『ジョン・ウッドヴィル』（*John Woodvil, A Tragedy*, 1802）が 1802 年に出版された時，姉メアリーの詩「ヘレン」‘Helen’とともに合わせて発表された．

チャールズ・ラム作品の著名な編集者である E.V. ルーカスは，チャールズのこの一連の創作活動を，見事な文学偽装が可能となるほどの「エリザベス朝時代人との親近性をよく例証するもの 」‘a perfect illustration of his fellowship with the Elizabethans’[注 10] だと言い，新しいものを生み出すことができる個性を示していると，チャールズの創造的アプローチを評価した．さらに，「ラムの心酔する時代のやり方で，このような意識的実験をしなければ，ラムの最高とされる作品は豊かとはならなかった」‘it is certain that, without such interesting exercises in the manner of his favourite period, his ripest work would have been far less rich’[注 11] と主張して，シェイクスピアの言葉のみが用いられるべきとした『シェイクスピア物語』は，「このような意識的な実験」‘these conscious experiments’[注 12] に連なると考えている．

鳴かず飛ばずの執筆活動の中で，「文学的変装遊戯」にかかわったことのあるチャールズは，偶像ともあがめるシェイクスピアの作品を若い読者向けに要約する際，シェイクスピアの仮面を被ることを躊躇わなかったことだろう．次章では，姉メアリーの謙虚な姿勢とは対照的に，チャールズが自らの「エリザベス時代風にする文才」‘Lamb's literary Elizabethanising’[注 13] を頼みとして執筆に関わったであろうことを，『シェイクスピア物語』の序文において明らかにする．

4.『シェイクスピア物語』制作の基本方針

ラム姉弟の創作の意図や気構えを読み取ることができる『シェイクスピア物語』[注 14] の「序文」[注 15] は , 姉メアリーが最初の 3 分の 2 を書き , 残る 3 分の 1 をチャールズが書いたことが，1807 年 1 月 29 日付けのウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）へ宛てた手紙から明らかとなっている[注 16]. 分量の差こそあれ,『物語』は，ラム姉弟が『夏の夜の夢』のハーミアとヘレナのようにひとつ机に並んで座って執筆したことも知られていることから，「序文」をラム姉弟共通のマニフェストと見なすのが適当であろう[注 17].

ラム姉弟は，「若い読者」とシェイクスピアとのファーストコンタクトをお膳立するファシリテーターとしての自らの役割を設定し, 彼らの『物語』が，「シェイクスピア学への導入（書）」‘an introduction to the study of Shakespear’（p.1）として，「若い読者が年を経て，豊かな宝物に出会う時, 彼らを待ち受けるであろう大いなる喜び」‘the great pleasure which awaits them in their elder years, when they come to the rich treasures’（p.1）を多少なりとも味合わせる使命を強く意識している．さらに，ターゲットとした若い読者に読みやすい散文とすることによって，語り手であるラム姉弟の解釈，すなわちシェイクスピア鑑賞を方向付けようとする，共有された姉弟の決断も伺える．特に前半部を書いたメアリーの「若い女性を指導するもの」‘an instructor to young Ladies’としての気概[注 18] に着目すると，正しく，発達段階的に方向付けようとするラム姉弟たちファシリテーターの役割が一層明らかになる．

次に，共通のマニフェストとは別の，物書きとして立身を志すチャールズのスタンスに焦点を当ててみよう．それは，シェイクスピアを要約したらではなく，シェイクスピアに要約をさせたかのごとく，チャールズはシェイクスピアとオーサーシップを共有しようとしていたことである．

散文化によって，シェイクスピアの言語の本来

（注 9）：文献 [13] VI, p.161.
（注 10）：文献 [13] I, p.394.
（注 11）：文献 [13] I, p.394.
（注 12）：文献 [13] I, p.394.
（注 13）：文献 [13] I, p.394.
（注 14）:4 章以下 ,『シェイクスピア物語』を『物語』と表記する.
（注 15）:4 章以下 ,「序文」からの引用箇所は文献 [13] III からページ数のみ記す.
（注 16）：文献 [13] VI, p.373.
（注 17）：文献 [13] VI, p.351.
（注 18）：文献 [13] VI, p.373.

の美しさを多分に失う危険があるゆえに，この物語を，「ちっぽけな，価値のない硬貨」‘these small and valueless coins’（p.1）に過ぎないとし，さらに，「シェイクスピアの比類なき作品をかすかに不完全に刻印したもの」‘faint and imperfect stamps of Shakespear's matchless image’（p.1）と称していることから伺えるように，姉メアリーには，シェイクスピアの仮面を被ろうなどという野心は微塵もなく，むしろ偽造された硬貨ほどの価値しかないと考えている．

一方，チャールズは，メアリーのように残念に思うことはあるものの，それは言語の問題ではなく，「無限に多様な運命の浮き沈みの多く」‘many surprising events and turns of fortune’（p.2）を割愛せねばならなかったという主として紙幅上の制約であり，要約することで失われてしまうであろうシェイクスピアの登場人物を守るためには仕方のない措置であったと認めている．

むしろ，「これらの物語が若い読者に意味するであろうもの，それとそれ以上のものを，若い読者が成長した時，シェイクスピアの真の劇が，彼らに証明してくれるであろうことを作家は願っています」‘What these Tales have been to you in childhood, that and much more it is my wish that the true Plays of Shakespear may prove to you in older years’（p.2）と述べて，まるでシェイクスピア自身が自らの悲劇を「要約」したらこうなると言わんばかり，シェイクスピアの原典と違わない価値をチャールズは自負しているかのようである．

次章では，チャールズがいかにシェイクスピアの『ハムレット』に対して創造的にアプローチを試みたのかを具体的に考察する．

5. チャールズ版「ハムレット」の検証

シェイクスピアの『ハムレット』劇とチャールズ・ラムによる「ハムレット」は，同一の物語内容（story）を異なる語り・物語行為（narrative）が産み出した独自の物語言説（discourse）である [24]．シェイクスピアの戯曲に限らず，演劇テクストにおいては，登場人物たちの間で交わされる会話は，それぞれの人物の視点から発せられているため多元的であり，その解釈も一様ではない．しかし，理解力がまだ十分とはいえない若い読者を対象として，シェイクスピアの戯曲を散文に改作した『物語』は，複雑に入り組んだメインやサブのストーリー，登場人物の視点など，何を圧縮して，何を詳細に語るのかを決め，その多元的な世界を一元化した語り・物語行為にしている [3]．これは，原典であるシェイクスピアとの良い橋渡しとなるが，物語内容が変化しないとも限らず，さらに，ファシリテーター役自身の解釈でもって，若い読者の劇への理解や解釈を抑制する危険性もはらんでもいる [3]．

それゆえ，最初に着目するのは，チャールズ版「ハムレット」の物語言説である．無韻詩（blank verse）で書かれたシェイクスピアの劇テクストから，若い読者にもわかりやすい散文へ転換する際には，様々な困難が伴う．例えば，詩的言語の美しさや意味，リズムを損なわない適切な用語の選択が必要となるであろう．このような困難さを，いかにチャールズが克服し，シェイクスピアの言葉の特徴や美しさを伝えているかを検証してみたい．

5.1 物語言説__音韻的，統語的構造

メアリーは，「シェイクスピアの詩が少しも変更せずにおかれた箇所においてでさえ，（中略）自然という土壌，野生の詩の庭から移植されたシェイクスピアの言葉は，自然の美しさを欠くことになった」‘even in some few places, where his blank verse is given unaltered, … yet still his language being transplanted from its own natural soil and wild poetic garden, it must want much of its native beauty’（pp.1-2）と過小評価していたが，一方，チャールズが執筆した「悲劇」におけるシェイクスピアの言語については，「対話でも，語りの部分においても，シェイクスピアの言葉がさほど変更されずに使用されていると認識できる」‘In those Tales which have been taken from the Tragedies, as my young readers will perceive when they come to see the source from which these stories are derived, Shakespear's own words, with little alteration, recur very frequently in the narrative as well as in the

dialogue’（p.1）と言っていた．おそらく，チャールズ版「ハムレット」における好例は，母ガートルードを叱責するクローゼット・シーンであろう．この場面で最もよく用いられている手法，すなわち，シェイクスピアからの原語を直接話法の文として地の文章に組み込むことは，シェイクスピア作品の雰囲気を語りに漂わせることができる，手っ取り早い方法であろう．

しかし，チャールズは，間接話法の使用においても，原典からの言葉とそれを取り囲む含意をできる限り，まるで象嵌細工のように，語りの文章中にはめ込むことができ，演劇的余韻を残す語り・物語言説に長けている．特に『ハムレット』劇には，ハムレットの心の動きがありのままに流れ出ている独白が，一般に 4 つ，その他，小さなものを含めると 7 つあるという，特異な劇であるため，ハムレットの独白がいかに『物語』の散文化されているかを考察すると，好例を示すことができるであろう．以下は，第 1 独白からの原典からの引用 (注 19) である．

憎むべき叔父クローディアスに息子扱いされた憤りと，再婚した母への嫌悪で，ハムレットは今しも心が折れんばかりになり，やがて，激しい動揺を表象するかの如く，次第に構文も乱れ始める．

> But two Months dead; nay, not ſo much; not two,—
> So excellent a King, that was, to this,
> *Hyperion* to a Satyr: So loving to my Mother,
> That he permitted not the Winds of Heav'n
> Viſit her Face too roughly. Heav'n and Earth!
> Muſt I remember? ---why ſhe would hang on him,
> As if increaſe of Appetite had grown
> By what it fed on; and yet within a Month? —
> Let me not think on't---Frailty, thy Name is Woman:
> A little Month! —or e'er thoſe Shooes were old,
> With which ſhe follow'd my poor Father's Body,
> Like *Niobe*, all tears —Why ſhe, even ſhe, —
> O Heav'n! A Beaſt that wants diſcourſe of Reaſon
> Would have mourn'd longer —married with mine Uncle,
> My Father's Brother; but no more like my Father,
> Than I to *Hercules*. Within a Month! —
>
> （1 幕 2 場，下線は筆者）

チャールズ版「ハムレット」(注 20) においても，原典の対応する箇所と同じで，心の動揺を隠さず，独り言ちる激しい心の内が等しく表されている．しかし，比類なき国王像ではなく，妻をこよなく愛する「父親」の像が強調されたがために，「今や」，母が，ハムレットの叔父と結婚していること，あろうことかその叔父は，亡夫の弟であることが付け加えられると，「かつて」母がその夫を愛していたことは実は見せかけで，母の不実さえ疑う印象が与えられる．

> but what so galled him, and took away all his cheerful spirits, was, that his mother had shown herself so forgetful to his father’s memory: and such a father! who had been to her so loving and so gentle a husband! and then she always appeared as loving and obedient a wife to him, and would hang upon him as if her affection grew to him: and now within two months, or as it seemed to young Hamlet, less than two months, she had married again, married his uncle, her dead husband’s brother　（p. 172，下線は筆者）

さらに，母の再婚に困惑するハムレットに感情移入して読めば，この部分だけは，自然と読書のリズムも変化することであろう．ここで紹介した第１独白を散文化した事例は，直接話法で書かれた例ではないが，独白の名残をとどめ，原典である演劇テクストの余韻が伺える好例となっている．

『物語』の原文では間接話法で書かれている箇所を，わざわざ直接話法で日本語訳にするという 1 つの傾向 (注 21) がある中で，散文で語りが統一さ

（注 19）：5 章以下，シェイクスピアによる『ハムレット』からの引用箇所は，チャールズが利用したであろうニコラス・ロウ（Nicholas Rowe）版（文献 [25]）を使用し，スペリングは原文の通り，幕・場数のみ記す．

（注 20）：5 章以下，チャールズ版「ハムレット」からの引用箇所は，文献 [13] III からページ数のみ記す．

（注 21）：間接話法を直接話法に変換する訳出は，概して、児童

れている完訳 [28-30] の 1 つである大場建治の翻訳には，シェイクスピアの原典の余韻を残す，独り言ちる訳出が認められるのが興味深いので，参照されたい．

あんなにりっぱな父親！妻をあれほど愛し，いつくしんでいた夫！母のほうも，父をこよなく愛する従順な妻としてふるまっていたはずではなかったか．まるで，募る愛情がいやましに夫にからみつくように，いつも夫に寄り添っていた．それがあれからふた月のうちに――いや，ハムレットにはふた月よりももっと短いことのように思われた____母が再婚してしまった，彼の叔父と．死んだ夫の弟と（注 22）．

5.2　物語言説__語彙選択

次に，重要な場面における，作品のテーマにも関係する特定の言葉に着目して，チャールズがいかにシェイクスピアの解釈に取り組んでいたかを伺わせる，語彙の使用法の類似と相違を検証してみたい．本論文で取り上げるのは，類似に関しては，「憂鬱」‘melancholy’，「蛇」‘serpent’，「恐ろしい」‘grisly’ の 3 つ，相違に関しては，「常軌を逸した」‘strange’，「元の状態にもどす」‘restore’ の 2 つの語彙である．

5.2.1　類似 _melancholy

「憂鬱」‘melancholy’ は，チャールズ版「ハムレット」に 6 回，シェイクスピアによる原典では 2 回 [32] し，同じくハムレットの心的状態を指す．しかし，チャールズ版では全て，ハムレット心的描写の際に言及されているのに対して，シェイクスピアの初出ではハムレット自身によって，悪魔が入り込む心の弱い状態として言及され，

> The Spirit that I have ſeen,
> May be the Devil, and the Devil hath Power
> T'aſſume a pleaſing Shape, yea, and perhaps
> Out of my Weakneſs, and my Melancholy,
> As he is very Potent with ſuch Spirits,
> Abuſes me to damn me.（2 幕 2 場，下線は筆者）

2 回目では，オフィーリアに対する扱いを盗み見たクローディアスが，恋が原因ではなく，何か危険なものを心の中でハムレットの憂鬱がはぐくんでいる状態だと判断する台詞の中で言及されている．

> ***King.***
> Love! his Affections do not that way tend,
> Nor what he ſpake, tho' it lack'd Form a little,
> Was not like Madneſs. There's ſomething in his Soul,
> O'er which his Melancholy ſits on brood,
> And I do doubt the hatch, and the diſcloſe
> Will be ſome Danger, which how to prevent,
> I have in quick Determination
> Thus ſet it down.　　（3 幕 1 場，下線は筆者）

つまり，シェイクスピアでは，ハムレットの憂鬱は，自らを臆病とも思う弱い心的状態ばかりでなく，復讐をも暗示するものである．

シェイクスピアにおけるこの語彙の初出が 2 幕 2 場の最後と，かなり遅いことから，父王の亡霊によってクローディアスの罪を知る以前のハムレットのふさぎ込んだ状態，すなわち，父の死を憂うる「憂鬱」の表象に着目したい．そのためには，1 幕 2 場のハムレット登場の場面だけでなく，それに先立つクローディアスの言葉から注意しなくてはならない．

> ***King.***
> Though yet of *Hamlet* our dear Brother's Death,
> The Memory be green; and that it us befitted
> To bear our Hearts in grief, and our whole Kingdom
> To be contracted in one brow of woe;
> Yet ſo far hath Diſcretion fought with Nature,
> That we with wiſeſt ſorrow think on him,
> Together with remembrance of our ſelves.
> （中略）

書に認められる．文献 [26],[27] を参照．しかし，完訳版でも安藤貞雄の 1 例はある．文献 [29] を参照．
（注 22）：文献 [31] p.231.

Ham.
Seems, Madam? Nay, it is; I know not Seems:
'Tis not alone my Inky Cloak, good Mother,
Nor cuſtomary Suits of ſolemn Black,
Nor windy Suſpiration of forc'd breath,
No, nor the fruitful River in the Eye,
Nor the dejected haviour of the Viſage,
Together with all Forms, Moods, ſhews of Grief,
That can denote me truly. Theſe indeed Seem,
For they are Actions that a Man might play;
But I have that within, which paſſeth ſhow:
Theſe, but the Trappings, and the Suits of woe.
（1 幕 2 場，下線は筆者）

ハムレットの憂鬱は，「悲しみ」‘grief’，「嘆き」‘woe’で表象されている．しかも，クローディアスが「賢明なる悲しみ」‘wisest sorrow’として，「悲しみ」や「嘆き」という「自然」‘nature’の情を，「分別」‘discretion’で制御しようとするのとは対照的に，ハムレットは，嘆息や涙のような所作は，真実の悲しみを表しきれるものではないと，その深い悲しみを訴えている．

興味深いのは，チャールズ版における「憂鬱」‘melancholy’の初出の箇所である．

insomuch that, between grief for his father's death and shame for his mother's marriage, this young prince was overclouded with a deep melancholy, and lost all his mirth and all his good looks; all his customary pleasure in books forsook him, his princely exercises and sports, proper to his youth, were no longer acceptable; he grew weary of the world, which seemed to him an unweeded garden, where all the wholesome flowers were choaked up, and nothing but weeds could thrive.
（p.172，下線は筆者）

クローディアスが意気揚々とフランスへ向かおうとするレアティーズからハムレットに向き直り，彼の悲しみに初めて言及したシェイクスピアの台詞「なぜにいまだ雲がおまえを覆っているのか」‘How is it that the Clouds ſtill hang on you?’と比較されたい．チャールズ版は，重要なイメージや，テーマを伝える語彙と，それに連なる語彙選択に気配りをすることによって，若い読者が成長して原典に触れた時の知的な反応を誘発する 1 例となっているように思えるからだ．つまり，憂鬱とは雲のように人物に影を落とすものらしいという印象が，実際に原典に触れて，クローディアスの台詞を聞いた時，ハムレットの喪服ばかりでなく，その表情を曇らせている悲しみや嘆きは，真の感情を表してはいないのだという，深い鑑賞にまでたやすくたどり着けるのかもしれない．まさにこれは，チャールズが望んだような，若い読者が成長した時はじめて手に取ったシェイクスピアの真の劇が与えてくれる読書体験なのであろう．

5.2.2　類似 _serpent

シェイクスピアでは 2 回 [32]，ラムによる「ハムレット」では 3 回，ほぼ同じ頻度で，いずれもクローディアスを指す完全なる類似の例である．

Ghoſt.
I find thee apt ;
And duller ſhouldſt thou be than the fat Weed
That rots it ſelf in eaſe on *Lethe*'s Wharf,
Wouldſt thou not ſtir in this. Now, *Hamlet*, hear:
It's given out, that ſleeping in my Orchard,
A Serpent ſtung me. So the whole ear of *Denmark*,
Is by a forged Proceſs of my Death
Rankly abuſ'd: But know, thou noble Youth,
The Serpent that did ſting thy Father's Life,
Now wears his Crown.（1 幕 5 場，下線は筆者）

What mostly troubled him was an uncertainty about the manner of his father's death. It was given out by Claudius, that a serpent had stung him: but young Hamlet had shrewd suspicions that Claudius himself was the serpent; in plain English, that he had murdered him for his crown, and that the serpent who stung his father did now sit on the throne.（p.173，下線は筆者）

しかし，この言葉の物語言説が両作品では著しく

異なることを，両作品における語り・物語行為から考察しよう．

シェイクスピアでは，デンマークをこれから襲うかもしれない災厄の前触れとして亡霊が登場する．そして，ガートルードの再婚，亡霊の出現が警告していると思われる，若きフォーティンブラスの進撃という国家的危機に直面しているデンマークの現状が紹介される．しかし，その危機をクローディアスが見事な政治的手腕で対処し，ハムレットと好対照をなすレアティーズの導入後に，憂鬱なハムレットが登場する．

一方, チャールズ版「ハムレット」では, 母ガートルードが，比類なき国王であった先の夫とは真逆の卑しき人物，しかも義理の弟であるクローディアスと思慮を欠いた再婚を，疑惑を招きかねない早急さで行ったがために，気高い精神を持つハムレットを憂鬱にしてしまったとなっている．

シェイクスピアでは，午睡の最中，蛇によって噛まれ落命したが，その蛇はクローディアスであったとハムレットに伝える亡霊が，ガートルードの再婚の 3 日前に出現したことから明らかなように，先の王ハムレットがデンマークの危機として，息子ハムレットに託す使命は明らかである．つまり，国王殺害という極悪非道を犯したクローディアスと王妃ガートルードの結婚を許さないということだ．それゆえに, チャールズ版「ハムレット」では，亡霊が真実を語る前に，クローディアスの仕業ではないかと疑念を抱き，さらには，蛇の誘惑によって堕落したイブのように，母ガートルードがどこまで加担していたのかと悩みさえするハムレットの苦悩を含めた，「蛇」‘serpent’の利用方法は，シェイクスピアの原典の意図をよく理解したというよりもむしろ，踏み込んだ解釈となっている点が特筆すべきと考えられる．

5.2.3　類似 _grisly

亡霊となって出現した亡き父の姿を，ハムレットがホレイショーに問いただす際に，父の髭について質問した台詞の中に現れ，シェイクスピアの作品でもあまり例 (注 23) を見ない「恐ろしい」‘grisly’という言葉は，エリザベス時代風にするチャールズの「文学的変装遊戯」の才を紹介してくれる興味深い言葉である．

大場建治も指摘しているように (注 24)，チャールズ版「ハムレット」では，先王の髭の形状をまず描写した後に，髭の色合いを説明していることが伺える．

> that its beard was grisly, and the colour a *sable silvered*, as they had seen it in his life-time:
>
> （p.173，下線は筆者）

しかし，大場は，この語彙に対する日本語訳出の不備ばかりでなく本国イギリス版の注釈も間違っていることを指摘した上で，‘grisly’の古形を知らずに「恐ろしい」と解釈したチャールズの誤りを指摘した (注 25)．

「灰色っぽい」という意味を表す‘grisly’を，フランス語の，「灰色」を意味する‘gris’から派生した‘grizzly’の異形（variant）と見なす解釈以外に，‘grisly’には，「恐ろしい」を意味する古英語‘gryslic’から派生し，「死やあの世，幽霊の出現などに関連する感情を引き起こす」‘causing such feelings as are associated with thoughts of death and ‘the other world’, spectral appearances, and the like’（grisly adj. OED 1a）という意味もある．

クライスト・ホスピタル校（Christ's Hospital）で, チャールズが友人コウルリッジとともに, ジェイムズ・ボイヤー師（The Reverend James Boyer）のもとで学んでいた時，おそらく 1789 年，演習として作成したラムの最初の詩「千の死の道」‘Mille Viae Mortis’が，コウルリッジの「チャタトンの死に寄せる哀歌」‘Monody on the Death of Chatterton’とともに残されていた (注 26)．チャールズの詩の一節「驚異と恐怖が同時に私の胸を満たし，/ こうして私は恐ろしい君主に話しかけた」‘Wonder and fear alike had fill'd my breast, /And thus the grisly Monarch I addrest’（下線は筆者）から伺えるように，チャールズにとって‘grisly’は慣れ

（注 23）：文献 [32] によると，詩作品も含め 4 例しかない．

（注 24）：文献 [31] pp.502-503.

（注 25）：文献 [31] pp.502-503.

（注 26）：文献 [33] I, pp.54-55.

た詩語であったのだろう．さらに，以下の OED からの引用は, チャールズが「詩人の詩人」‘Poet’s Poet’(注 27) と賛辞をおくったエリザベス時代の詩人エドモンド・スペンサー（Edmund Spenser）からの OED 引用例であるが,

> 1579 E. Spenser *Shepheardes Cal*. Nov. f. 45 Up grieslie ghostes.
> 1590 E. Spenser *Faerie Queene* I. v. sig. E2 Griesly Night, with visage deadly sad.

エリザベス時代の文学に精通しているチャールズであるからこそ，死と結びつく言葉‘grisly’をあえて使うことによって，亡霊のイメージを具象化できたのではないかと考える．

5.2.4　相違 _strange

シェイクスピアでは，‘strange’の品詞変化であるものも含め，‘stranger’1 回，‘strangely’2 回，‘strange’は 9 回，認められる [32]．9 回の内，6 例は，亡霊の出現にかかわる 1 幕 1 場と 1 幕 5 場に集中していることから伺えるように，特に注意すべき点は，亡霊が，実弟クローディアスによる殺人を,「これほど悪逆，奇怪，非道な殺人はない」‘most foul, strange, and unnatural’と表したことである．OED では,「見慣れない，珍しい種類の ; 珍しい，並外れた，特異な，道から外れた」‘Of a kind that is unfamiliar or rare; unusual, uncommon, exceptional, singular, out of the way’（strange adj. OED 8）という現在では廃語となっている意味で用いられているため,「シェイクスピア以後に英語に入ってきた言葉はできる限り避ける」‘therefore words introduced into our language since his time have been as far as possible avoided’（p. 1）という「序文」における宣言のように，若い読者を想定したチャールズ版「ハムレット」においては, OED 8 のような意味での形容詞‘strange’の使用は考え難い．そのためか，明らかに用例数は減り，‘strange’は 3 回，‘strangely’が 1 回のみ認められる．最も着目すべき点は，クローディアスによる王殺しではなく，ガートルードの再婚を‘strange’と称したことであろう．

> Gertrude, queen of Denmark, becoming a widow by the sudden death of King Hamlet, in less than two months after his death married his brother Claudius, which was noted by all people at the time for a strange act of indiscretion, or unfeelingness, or worse:（p.172，下線は筆者）

しかしながら, チャールズ版「ハムレット」では，ガートルードがクローディアスの悪事に少なからず加担しているように表象されていたことを考えれば，続けて「人情のない」‘unfeelingness’と補足されたことからも容易に伺えるように，シェイクスピアの原典で認められる「常軌を逸した」の意味を込めて，ガートルードの再婚を‘strange’と表したと思われる．まるで，ガートルードとクローディアスの共謀関係を強く強調するかのような，‘strange’の語彙使用は，チャールズ版「ハムレット」が，クローディアスへの復讐として，共犯であるガートルードへの批判に焦点を当てている証左になり，これもシェイクスピアの原典よりも踏み込んだ解釈の 1 例となるであろう．

5.2.5　相違 _restore

若い読者にとってチャールズ版「ハムレット」は果たして理解しやすいものかどうかと不思議に思う点が，‘grisly’や‘strange’だとすると，さして難解でもない，ガートルードがオフィーリアに向けた 1 文の変更はどのように考えるべきであろうか.

> ***Queen***
> I ſhall obey you:
> And for your part, *Ophelia*, I do wiſh
> That your good Beauties be the happy cauſe
> Of *Hamlet*'s wildneſs. So ſhall I hope your Virtues
> Will bring him to his wonted way again,
> To both your Honours.（3 幕 1 場，下線は筆者）

ハムレットの「乱心」‘wildness’がオフィーリアの美しさが原因ならば，オフィーリアの美徳の

（注 27）：文献 [34] p.75.

おかげでハムレットは立ち直り，2 人の名誉ともなるようにとガートルードが願う 1 文である．そもそも，ハムレットの乱心は，父を亡くしたことと，自らの早すぎた結婚しか原因が思い浮かばなかったガートルードには，つれなくされたがための息子の乱心はにわかに信じがたいことであろう．そのような疑念があるからこそ，この台詞は，むしろ，オフィーリアに会うための通い慣れた恋の道行きに再び，ただし，節度をもって，足を向けてくれればとの意味と解釈もできる．

> And the queen wished that the good beauties of Ophelia might be the happy cause of his wildness, for so she hoped that her virtues might <u>happily restore him to his accustomed way again</u>, to both their honours. （p.176，下線は筆者）

チャールズ版「ハムレット」では，ガートルードの言葉をほぼ活用することによって，シェイクスピアの原典の響きを反響させていることが伺えるが (注 28)，大きな変更が 2 箇所ある．1 つは，‘wonted’を‘accustomed’に変更したことで，これは，‘wonted’がシェイクスピアにおいてもやや稀であり，詩集も含め，全作品を通じて 14 回 [32] と用例も少ないからだと，納得がいく．しかし一方で，‘bring’という基本語彙を，わざわざ‘restore’に変更したのかという疑問が残る．以下の，シェイクスピアからの引用を参照されたい．

> ***Ophelia*** O heav’nly Powers! <u>reftore</u> him.
> （3 幕 1 場，下線は筆者）

チャールズが敢えて使用した言葉‘restore’は，「尼寺に行け」とハムレットに冷酷に扱われた後の，オフィーリアの叫びを思い起こさせる一方で，ハムレットの心を再び自らに振り向かせることなどできないほど完全に，ハムレットの気高い心が崩れてしまい，彼女の恋も破れたことを悟ったオフィーリアの心の嘆きを表象する．

シェイクスピアのガートルードとは違って，チャールズ版のガートルードは，ハムレットの乱心の原因がオフィーリアへの恋慕にあると信じている．そのため，天の助けではなくて，オフィーリアこそがハムレットの心を正常に戻す頼みの綱だと思うガートルードならば，ここで‘restore’を使っても少しも不思議ではない．

チャールズ版ではおそらくハムレットの気高い気質を貶めることになるため，ハムレットの治癒を託されたオフィーリアが父ポローニアスの策略に従い具体的に何をしたのかが，語られることはない．しかし，次にオフィーリアが登場するのは弔いの場面であることから伺えるように，ハムレットを憂鬱から立ち直らせる可能性を秘めたオフィーリアの愛が，復讐というハムレットが負うことになった「荒っぽい仕事」‘the rough business’（p.176）の犠牲になったという冷酷な事実だけが結果として示される．

上述したように，物語内容の解釈が変化せざるを得ない物語言説をもって，果たして，チャールズは，シェイクスピア劇と違わないものにすることができたのか，はたまた，似て非なるものにしてしまったのか，最後に，チャールズ版「ハムレット」の語り・物語行為について考える．

5.3　語り・物語行為

チャールズ版「ハムレット」において，王子と良き対照をなすレアティーズや若きフォーティンブラスが必要ではなくなるほどに，亡霊がハムレットに命じた 2 つの「荒っぽい仕事」____残虐非道な殺人者クローディアスへの復讐と，不義の結婚に走ったガートルードには良心の呵責に苛ませること____に焦点化することを可能にしたのは，出来事のシークエンスである．

実際に，シェイクスピアの原典では，亡霊の出現から始まる幕開けは，決してガートルードの再婚を焦点化するものではなく，ハムレットが亡き父の亡霊と対峙して初めて，ガートルードの再婚が死者を呼び起こしたのだとわかるのに対して，

（注 28）：‘To both their honors’に関しては，シェイクスピア時代の表現であり，現代の文法ならば，‘to the honour (or credit) of them both’とするべきだ．文献 [35] I, p.132 を参照．

チャールズ版では，再婚が亡霊を登場させたことが明確にされている．

しかしながら, シェイクスピアの『ハムレット』劇にしろ，チャールズ版にしろ，亡霊から託された，クローディアスへの復讐を意味する「荒っぽい仕事」という主題に，その後のプロットが求心的に収斂していくのを阻む要素が 1 つある．それは，時代によって評価を分かつ，憂鬱あるいは逡巡，臆病と様々に表象されるハムレットの内的動きである．ハムレットの逡巡の理由は，シェイクスピアの原典には明示されていないが，チャールズ版によると，憎むべきクローディアスは母の現在の夫であるという事実がハムレットの決意を鈍らし，ハムレットは復讐を誓いながら，人殺しという行為の非道性に身震いをする．

> Or if it had been, the presence of the queen, Hamlet's mother, who was generally with the king, was a restraint upon his purpose, which he could not break through. Besides, the very circumstance that the usurper was his mother's husband filled him with some remorse, and still blunted the edge of his purpose. The mere act of putting a fellow-creature to death was in itself odious and terrible to a disposition naturally so gentle as Hamlet's was.　（p.176，下線は筆者）

それもこれも，ハムレットの「穏やかな気質」‘gentle’，「気高い心」に焦点を当てたチャールズの語り・物語行為に原因があると考えられる．

ハムレットが実際にどのような気質をしているのかは，シェイクスピアでは，例えばオフィーリアの「気高いお心」‘a noble Mind’（3 幕 1 場，下線は筆者）が好例であろうが，これは登場人物の口を通して語られる言葉に過ぎず，真実かもしれないし，恋人の贔屓目かもしれない多義性を有している．しかし，チャールズ版「ハムレット」において，外的焦点化の物語言説 [24] で読み解かれるハムレットの以下のような資質は，

> high-minded / honourable / gentle（2 回）/ virtuous / sweet / loving / noble（2 回）/ prince-like

河合祥一郎が「ロマン派的な青瓢箪が優柔不断に悩んでいるのではなく，ヘラクレス的な強靭な肉体と行動力を持つ男が，理性と熱情に引き裂かれて，どうにも行動できないでいるというジレンマこそ，ハムレット的な状況」(注 29) と呼んだ，ある種の混沌としたハムレット像を 1 つの像に取りまとめる効果がある．それゆえ，以下に引用する文章が，ハムレットの気高い気質をたたえる賛辞として，ハムレットの悲劇を締めくくるのも当然のことと言えるであろう．

> And, thus satisfied, the noble heart of Hamlet cracked: and Horatio and the by-standers with many tears commended the spirit of their sweet prince to the guardianship of angels. For Hamlet was a loving and a gentle prince, and greatly beloved for his many noble and prince-like qualities; and if he had lived, would no doubt have proved a most royal and complete king to Denmark.　（p. 183，下線は筆者）

人間の持って生まれた本質あるいは性質を印象づけるチャールズ版のハムレット像では，たとえ愛する女性を無碍なく退け，母を厳しく叱責し，復讐のために人の命を奪うことになっても，そのような残忍な行為によっても汚されることのない，人間としての気高さが，何はなくとも一番に，強調されている．

6. むすび

本論文では，『シェイクスピア物語』に取り上げられた 20 の作品中，弟チャールズによって執筆された 6 つの悲劇の内，最も長い劇『ハムレット』を考察し，エリザベス時代の文学に精通した才を活かして，「文学的変装遊戯」に手を染めたチャールズが，若い読者のために，シェイクスピアの劇詩の言葉の鑑賞と，難解なハムレット像の理解を助ける物語言説を産み出したことを検証し

（注 29）：文献 [36] p.43.

た．チャールズが解き明かしたハムレットの気高い人物像は独創的であり，ロマン派時代の道徳に影響を受けた時代錯誤的解釈だと異論があるかもしれない．しかしながら，ハムレットの悲劇を単に粗筋化して若い読者の文学的知識を増すのではなく，シェイクスピアによるハムレット像に１つの解釈を投影し，読書を通して若い読者に文学的体験を手ほどきするというチャールズの語りは，彼が生きたロマン派の時代にとって間違いなく新しい創造的アプローチであったことを評価すべきと考える．

＊本論文は第 60 回シェイクスピア学会（2022 年 10 月 1 日，甲南大学岡本キャンパス）において発表したものを加筆，修正したものである．

文　　献

[1] William Shakespeare, *The Family Shakespeare in Ten Volumes; in which nothing is added to the original text; but those words and expressions are omitted which cannot with propriety be read aloud in a family*, ed. by Thomas Bowdler, 10 vols, Longman, London, 1825.

[2] David Skinner, “A Critical and Historical Analysis of Charles and Mary Lamb's *Tales from Shakespear* and Thomas Bowdler's *The Family Shakespear*,” Doctoral Dissertation, University of Sheffield, 2011.

[3] Laura Tosi, “The Narrator as Mediator and Explicator in Victorian and Edwardian Retellings of Shakespeare for Children,” *Cahiers victoriens et édouardiens* [Online], vol. 92, pp. 1-16, 2020.

[4] Vermeulen, Elriza Chimeni, “Digesting Shakespeare: Two Centuries of Adapting A Midsummer Night's Dream for Children,” MA Thesis, Victoria University of Wellington（2013）

[5] Darlena Ciraulo、“Shakespeare and Education in the Lambs' Poetry for Children and Tales from Shakespeare,” *Borrowers and Lenders: The Journal of Shakespeare and Appropriation*, vol 2, No. 1, pp.1-16, 2006.

[6] Kate Harvey, “A Classic for the Elders” : Marketing Charles and Mary Lamb in the Nineteenth Century,” *Actes Des Congrès de La Société Française Shakespeare*, 34, pp. 1-14, 2016.

[7] Jean I. Marsden, “Shakespeare for Girls: Mary Lamb and Tales from Shakespeare,” *Children's Literature*, 17, pp. 47-63, 1989.

[8] *Women Reading Shakespeare, 1660–1900: An Anthology of Criticism*, eds. by Ann Thompson and Sasha Roberts, Manchester University Press, Manchester, 1997.

[9] Molly G. Yarn, *Shakespeare's 'Lady Editors': A New History of the Shakespearean Text*, Cambridge University Press, Cambridge, 2021.

[10] Stanley Wells, “Shakespeare Lecture: Tales from Shakespeare,” *Proceedings of the British Academy, 73,* pp.125-52, 1987.

[11] Abigail Rokison, *Shakespeare for Young People,* Bloomsbury Publishing, London, 2013.

[12] David Chandler, “Charles Lamb, James White, Shakespeare's Papers, and John Warburton's Cook,” *Doshisha Studies in English*, 78, pp. 1-25, 2005.

[13] *The Works of Charles and Mary Lamb*. ed. By E.V. Lucas, 7 vols, Methuen, London, 1903-1905.

[14] *Mary and Charles Lam: Poems, Letters, and Remains*, ed. by William Carew Hazlitt, Chatto and Windus, London, 1874.

[15] Howard Marchitello, *Remediating Shakespeare in the Eighteenth and Nineteenth Centuries,* Palgrave Macmillan, Cham, 2019.

[16] 福原麟太郎，チャールズ・ラム傳，福武書店，東京，昭 57.

[17] 種村季弘，偽書作家列伝，学習研究社，東京，2001.

[18] Margaret Russett, *Fictions and Fakes: Forging Romantic Authenticity, 1760–1845*, Cambridge University Press, Cambridge, 2006.

[19] 書物学，第 14 巻，勉誠出版，東京，2018.

[20] *The Works of James Gillray, the Caricaturist; with the History of his Life and Times*, ed. By Thomas Wright, Chatto and Windus, London, 1873.

[21] パトリシア・ピアス，シェイクスピア贋作事件・ウィリアム・ヘンリー・アイアランドの数奇な生涯，白水社，東京，2005.

[22] 大場建治，シェイクスピアの贋作，岩波書店，東京，1995.

[23] Sylvan Barnet, “Charles Lamb and William Ireland,” *Notes & Queries,* 198, p.491, November, 1953.

[24] ジェラール・ジュネット，物語のディスクール・方法論の試み（叢書記号学的実践 2）, 花輪光，和泉涼 訳，水声社，東京，1985.

[25] *William Shakespeare, The Works of Mr. William Shakespear*, ed. by Nicholas Rowe, vol.5, Jacob Tonson, London, 1709.

[26] ラム, シェイクスピア物語（上下巻）, 厨川圭子　訳, 偕成社，東京，2004.

[27] ラム，シェイクスピア物語（岩波少年文庫 546），矢川澄子訳，岩波書店，東京，2011.

[28] ラム，シェイクスピア物語（新潮文庫），松本恵子　訳，新潮社，東京，平 2.

[29] チャールズ・ラム，メアリー・ラム，シェイクスピア物語（上下巻），安藤貞雄　訳，岩波書店，東京，2000.

[30] チャールズ・ラム , メアリー・ラム, シェイクスピア物語（現代教養文庫 603），本多顕彰　訳，社会思想社，東京，1967.

[31] チャールズ＋メアリー・ラム,『シェイクスピア物語』，大場建治　訳，沖積舎，東京，2000.

[32] Concordance of Shakespeare's Complete Works, Open Source Shakespeare, http://www. opensourceshakespeare.org/concordance/, Accessed 25 December 2023.

[33] E.V. Lucas, *The Life of Charles Lamb*, 2 vols, Methuen, London, 1905.

[34] Leigh Hunt, *Imagination and Fancy*, Smith, Elder, and Co., London, 1844.

[35] *The Oxford and Cambridge edition of Tales from Shakespear*e by Charles and Mary Lamb. ed. by S. Wood and A.J. Spilsbury, 2 vols, George Gill & Sons, London, 1904.

[36] 河合祥一郎，100 分 de 名著 ハムレット，NHK 出版，東京，

2014.

李　春美

大阪女子大学 大学院文学研究科修士課程英語学英米文学専攻 修了．文学修士．広島女学院大学にて博士（文学）取得．短期大学や大学にて，長年英語教育に従事．大阪大学大学院医学系研究科国際・未来医療学講座「医療通訳」養成コース（日本語・英語）にて医療通訳を学び，通訳案内士（英語）の資格も取得．英国ルネサンス期の劇作家シェイクスピアの歴史劇を専門として，著書に『エリザベス女王最後の十年間・シェイクスピアのイングランド歴史劇からの考察』，『英語の成長と構造』（翻訳・共訳）（以上，英宝社）等．日本英文学会，日本シェイクスピア協会，日本ヴィクトリア朝文化研究学会，日本医学英語教育学会会員．